

構想力におけるビジョン特性

Vision properties in the power of "kohsouh"

半田智久 (早稲田大学 先端科学・健康医療融合研究機構)

Motohisa HANDA (Waseda University, Consolidated Research Institute for Advanced Science and Medical Care)

構想力にビジョンとしての性質を読んだり、託したりすることは、構想ということばを自著の標題に用いた著者たちへの調査結果(半田,2004)や、最近提起された構想力観のひとつ棋士谷川浩司(2007)の見立てにあらわれている。もちろん、構想はおそらく多様な複合概念として理解できる精神過程であろうから、その力を単に別の概念で換言して解せることはないだろう。また、その一部を他の諸概念で写し取っても、その読みにはあらためて総合的な見方が要請されるはずである。

それを踏まえてとりあえず構想力に概念分析的に接近するなら、上述の調査結果によれば構想力を構成する下位概念として「ビジョン」「デザイン」「コンセプト」をとらえることができた。また、谷川の場合は構想力を「知識」「状況判断」「先見(ビジョン)」「時間管理」の構成体とみている。このふたつの見立てについていえば、コンセプトに知識、デザインに状況判断と時間管理をやや強引に重ねることができるともかもしれない。一方、ビジョンについては一致をみている。それを理由にするわけではないが、本稿では構想力に対する分析的考察の一端としてその力に見いだされ、あるいは託されているビジョンの特性に焦点を定め考察する。

1. 観ること

構想力という力もち、またその力に求められるビジョンには対象を見るという視知覚を超えて、時空の先々への見通しや展望、あるいは予期といった拡張した意味が託されている。だが、それを検討するまえに、むしろ見ることの第一義である視知覚に戻ったビジョンとしての構想力をおさえる必要がある。というのは、構想がこちらの内面に描かれる想像を外部に表現化する過程で

あることからすれば、とりわけピュイサンスとしての構想力には必然的に視覚、わけても視覚運動協応がのはたらきが深くかかわるからである。むしろ構想における形象形成は視覚に限らず、他の五感のいずれのフィールドにおいてもまたそれらの複合においてもなされる。だが、かたちを語るうえで空間表象を定位できる点で視覚が他の場合を代表して理解しやすいはずである。

その視覚としての構想は第一に想像されたことから、すなわち心像の暫定的な眼前への現在化、プレゼンテーションとしてある。言い換えれば、構想は試みに、ある場合にはおずおずと、こころのなかに描いた曖昧模糊とした何がしかを表出したものとなる。元来、視覚は知覚運動協応のプロセスのなかで発達し、機能している。だから、構想に伴う視覚は形成運動と共に変化するかたちをとらえながら、同時に表現化行為にフィードバックやフィードフォワードを与えていく全的性質のものとなる。これはむしろ構想者自身の営みであるが、他者の構想に接する場合は必然的にその知覚運動協応性が埋め込まれた表象に、見る目や行為を導くようなアフォーダンスを得ることにつながる。

ただ構想者の側に戻れば、この視覚の基本機能の発揮は常識的な意味での見る行為ではなく、視覚に備わる基本特性が十全に発揮されるという限なきエッセンシャルの意味になる。顕現されるプレゼンテーションが暫定的であるのは、もとよりかたち不定の心像を表現化するからだが、それゆえの不安定感は相応の動揺と緊張をもたらす。その上で現示した表象に対して「みる」行為がなされる。想像の表現としてどれだけふさわしいものになりえたか、というこの眼差しは単なる「見る」行為というよりも、観察に接近した「観る」行為とならざるをえない。「観」の字は「觀」の略字だが、

この偏は「めぐらす」という意味である。観るとはまさに対象を注意深く回し、あるいはみずから回ってみることである。「注意とは知覚そのものである」と語ったのは、Neisser (1976) であった。彼は注意が知覚というところの過程の基本機能であるとみてつぎのようにも述べている。

「注意がもたらすであろう構造化された情報を予期して、われわれは見るものを選択している」

これはまさに知覚の本態的な働きに違いない。その注意を前面にセットした観る行為の焦点は単に見る対象に注がれるだけではなく、想像と構想の比較過程にも向けられる。だが、その一方の心像は大方、輪郭が滲み、あるいは動揺して定まらない。だから、とりあえずは構想を心像の核たる部分に重ねるかたちであてがい、想像とのあいだで調整や同化をしつつ形象の顕現にむかう。その表現化の過程は想像と構想のあいだでの振動ともいうべき細かなやりとりの連続となる。

東洋美学者の金原省吾 (1933) は構想力に関心を払ったひとりだったが、写生のような表現行為において、

「観る働は、描く働によってなされ、描く働は観る働によってなされる。観る働と描く働とは連続した一連の働である」

とし、ふたつの心身過程の相即不離性を強調した。観る働は対象に対する接近であり、それゆえの新たな発見や関心を生みだし、観る働を持続させると同時に描く働を誘う。金原は、

「あらわに見ゆるものが、見えざるものによって支持せられてくる。この支持がすなわち構想である」

と語っている。この見えざるものとはすなわち想像を中心にした感情や感性などピュイサンスとしての構想力が表現化において総合していく内容である。

身体の外部に具体的なかたちをとって表現化する構想と内面で働く想像は相互に作用しあいながら、心像と形象の漸進的な重ね描きをする。その過程で想像力は構想を通じて想像のおぼろげな全

景を感知していく。むろん知覚内容も多くが想像力の産物で構成されているから、そこに結構されるものが自身を超えた先への見通しに欠けていることの制約と限界は薄々にせよ意識せざるをえない。そのこともあって構想自身が放つファカルティとしての構想力に対して、想像力はほとんど常に反射的に反応しつつも従おうとはしない。それと同時に想像の内生性、つまりそれが内側に閉じられた活動であるといういまひとつの現実的な制約も意識せざるをえない。その枠を乗り越える糸口が外部への表現化につながっている構想にあることも認めざるをえなくなる。どれほどすばらしい想像も構想なしには実存できない。この相克を原動力にしなが、想像力はファカルティとしての構想力に反発しつつ、リコレクティブに想像を膨らませ、ピュイサンスとしての構想力に対して心像を反映した的確な表現（基本的にはアポリア）を求めることになる。この想像力と構想力のあいだに継起していく押し引き含みの循環的な協働は、まさに Weizsäcker (1940) が自我と環界との関係に焦点をおいて、そのあいだのやり取りに生じる円環的動態の全体性に対して名づけたゲシュタルトクライス (Gestaltkreis) である。

ゲシュタルトクライスは単なるフィードバックループにもとづくメカニカルな調整や同化ではなく、生命あるものが宿す自己組織的な運動である。すなわち、心像に合わせてかたちを形成しようとするのが、必ずしも主体から客体への一方通行の制作プロセスにならないのは、元来曖昧な心像にとっては表現化されたかたちを得ることで、自身の姿を観るという客体から主体への映し返しを無視できないという現実があることによる。それと同時に、その客体からの作用によって主体は決してそれをそのまま真に受けず、想像力を焼き付けてかたちに表現され得なかった心像の部分に働きかけ、さらに発展的、総合的に新たなかたちを構想するだろうからである。二相の構想力が基底的に宿しているビジョンには主体を鏡にしてその先の外部に映じた心像の姿を決してそのまま受け入れず、むしろそれを自壊的に吸収したうえで、非平衡の動的定常状態を維持すべく心像を基盤に新たなかたちを新生しつづけるウロボロスの自己消化的円環運動のまなざしをみることができる。

2. 予期と予想のゲシュタルトクライス

構想力のビジョン特性を最も素直に解釈すると、前項の冒頭で触れたように、先々を展望する、見通す力ということになる。5-2の調査結果でも目立って多くの回答に構想や構想力のことばにこの意を読み、託していることが認められた。同じくこの意味をもつ英動詞に envisage あるいは envision があるが、同調査で構想の英単語換言を求めた結果にもこれらの回答が認められた。あらためてこの意味でのビジョンを規定するなら、この構想におけるビジョンは時間と空間という人間にとっての二大表象世界における見通し、見込み、遠方や未来への表象をかたちづくる形成力を指すといえるだろう。

むろんこうした意味での構想の背後には予想という想像とのつながりがある。構想力は全体としてこの想像に期待や覚悟、あとに述べる体勢としての構えをつなげて予想を具現に向けて準備する。前項では対象に対して身体運動的、体性感覚的に想像と構想が直動して循環する観る働きと描く働きの動態をみた。この場合のゲシュタルトクライスはその基本形においては構想が身体、とりわけ手指の運動をつうじてかたちづぐられ、あるいは身体の運動そのものにあられる。だから、循環は空間的には身体の動きが及ぶ範囲、時間的にはその運動と律動して浮上する。ここでの観る働きと描く働きの関係は直立的であり、それだけに当然緻密な循環も形成される。このことはあらゆる職人技や工芸、芸事の匠においてあきらかである。また、この構想の形象はおおた身の丈のうちに留まる。それは想像の自由性が構想において身体の矩によって必然的にまとまり落ち着くことによる。結果的にその構想は人間一般の自然な運動や眼差しに適したアフォーダンスをもつことになる。

この場合、構想力のビジョンはもはや時空間的に先方を展望するというではない。たとえ視線が向こうに注がれていても身の丈のなかで反射されて手元に戻り、ふたたび肉眼による観る働き、観察に還る。この循環は必然的に手仕事の範囲において想像力を働かせ、そこでの心像生成とそこに繋がる身体運動、かたちづくりを導いていくことになる。

このいわばマイクロゲシュタルトクライスにお

ける観る働きに対して、予期と予想のビジョンではマクロゲシュタルトクライスで働く構想力をみることになる。マクロゲシュタルトクライスでは観る働きと描く働きが複数のマイクロゲシュタルトクライスを内包しながら循環する。ここに生じる想像と構想の循環はまさに人間特有の心的機能といえる。ここにはおそらく人間がその進化過程においてオーバースローでものを投げることを身につけた唯一の動物であったことが深く関係しているよう。以下その投擲能の獲得過程にかかわった想像と構想について考えながら、そのプロセスで身につけ、予期と予想のマクロゲシュタルトクライスを駆動させるに至った3つの心的働きについて推察してみる。それらは第一に時間と空間の表象形成、第二に分身ないし分与、第三に遅延と抑制である。

時間と空間の発生

原始、猿人は立ち上がり、自由になった手腕で、手にしたものを投げ始めるようになった。むろん、当初それはチンパンジーにみるように、コントロールのおぼつかないアンダースローによる単なる放り投げであっただろう。それだけに手にしたものを目標に向けて投げつける行動はなかなか成り立ちがたかったと思われる。それがまったく位相の異なる運動に変化する段階が来る。手にしたものが、少なくとも自分に関わりがあるものとして意識化されるようになる段階である。それは投げた結果を見に行くことから生じたと考えられる。ぎこちなく放り投げる程度の段階では、投げつけるものや投げ方にはほとんど関心が向かない。もともとと思うように投げられないから、投げる行為そのものに注意が至らない。前に Neisser の指摘にみたように、注意しないということは基本的に知覚しないということである。極言すれば、投げても投げたものを見ないということであり、いわんやそれを観ることは生じえなかった。したがって、投げることの想像と投げる行為、あるいはその結果としてあられるかたち、すなわち構想とは結びつくことがなく、投げる行為は場当たり的で単純な運動として霧散していた。だから当然、投げることについての想像も膨らんでゆかない。つまり投擲の行為や方法には到底思いが及ばなかった。この段階では投げる行為は吠えることや立ち上がることと同様の威嚇行動のひとつに留

まりつづけた。だから、投げつける行為も身の丈の範囲でおさまっていた。

このことから逆に、投擲行為の位相変化はほんの五、六歩先の個人空間という意味での身の丈を超えたところにまで目的的に投げられるようになった時に生じたと考えることができる。現在のわたしたちからすれば、それは造作もないである。だが、二足歩行をはじめようになつた猿人がその類いの投擲行為をなすようになるまでには、種としての身体構造全体の変化を必要とした。したがって、そこに至るまでには途方もなく長い時間が流れた。その時間は人類が直立二足歩行をはじめたと考えられるアウストラロピテクスのおよそ400万年前から、オールドワン型の人類最初の石器が現れる時期を経て、約100万年前ころから見いだされるアシュール型の石器が現れ出すくらいまでの長さ、つまり300万年ほどかかったと見積もられる。

そのアシュール石器にしても旧石器に分類されるかなり原始的な石器である。しかし、そのなかにハンドアックスや、なた状のクリーバーが出現する。ここにサル型からヒト型へと身体構造が大きく変容した跡をみてとることができる。この変化は「人間への条件」のひとつとされているものであり、直立二足歩行に並ぶ身体革命であった。というのは、クリーバー（なた）にはそれを握り操作しつづけるための握力はもちろん、肩の上までの振りかぶり動作や、そこから手腕のみならず足腰を含めた全身の調整動作をもって石器を的確に振り下ろす行為が可能になったことがあらわれているからである。

ギニアの野生チンパンジーの集団が石を使ってアブラヤシを割って食べることや、南米のフサオマキザルが同様の行為をすることがよく知られている。それらの映像をみると、彼らの石の使い方はそれを掴んで持ちあげ、あとは石の重さを利して持ちながら落とすといった動作の反復になっていることがわかる。この動作を対象の破碎目的でより効果的におこなうなら、石を頭上まで振り上げて狙いを定めて打ち付ければよいはずである。だが、そうした動作を当たり前のようには考えてしまうのはそれができる人間だからである。チンパンジーやオマキザルには身体構造的に無理なくその動作を為すことができない。それは直立二足歩行をするようになり、二本の手腕がただ自由に

なつただけでは可能にならない。それをするには足腰の十分な発達と、肩を中心とした全身の骨格や筋肉が解剖学的に変化する必要がある。そう考えると、漸進的進化にせよ断続平衡進化にせよ、その必要を満たすために300万年という長大な時間がかかったことはもつともなことといえよう。

こうしてクリーバーの出現はその使用とは別の行為、すなわち人類が握った石を振りかぶり、目標を定め、足腰を入れたうで手にしたものを投げるといふオーバースローが可能になったことを伝えている。当然、これによって棒やその先に石をくりつけた槍も生み出されたことだろう。だが、オーバースローという投擲法は単に新しい投げ方と道具の誕生を示すに留まるのではなく、人間の精神そのものに劇的な変化をもたらすこと、そのイニシエーターになったと考えられる。

精神革命としてのオーバースロー

オーバースローは第一にものを遠くに投げることに、第二に投擲行為に巧みな統御力をもたらした。遠くに狙いをつけてものを投げられるようになると、投げた結果が投げた位置からは見えない場合もでてくる。このことは人類の精神発達に意外なほど飛躍をもたらすことになったはずである。そのわけは以下のごとくである。第一に、身体の動きに直結して効果が及ぶかぎりのことは為すことの多くがほとんど遅延なく直接眼前の変化として起こる。そのため、時空の感覚に「間」が感じられる経験が生じがたい。ところが、遠くに石を投げて生じた何らかの結果を見に行く必要がでてくると、それまでの時空は時間と空間という間として意識せざるをえなくなる。この間（ま）は身の丈にある時と距離感を越えた延長世界をつくりだす。このことは想像世界の領域を飛躍的に拡大する契機をもたらしたはずである。自分の存在を知らしめる範囲も時間と空間のなかで拡張し、想像のなかではその範囲を仮想的に想い描けるかぎり広げられることを知るようになる。一方で、その拡張が壁に当たることで、死すべき存在というみずからの運命を意識するようにもなった。だから、オーバースローは人類にとっては革命に値する行為となった。その体得は「人」にもうひとつの「間」をもたらし、事実上「人間」を誕生させたといつても過言ではない。

時間と空間という表象は想像と構想の主客通態

の循環を支えるフィールドになった。言い換えれば、想像と構想は時間と空間という大なる表象域を入会地としてもつことで、その場を介して交通すると同時にそれぞれの営みを一時的に溜め育てる間(ま)もつくりだすことにつながった。その間(ま)はより遠くに、まだ見ぬもつと先へと広がる想像と、投げた結果の構想とのあいだに、具体的には歩くなり駆けるなりする身体移動の過程のなかに期せずともたらされた。

また、投げた結果を知るため、あるいは成果を手に入れるためにそこに行き、それで結果がすぐにわかればよいが、わからなければ何かをもたらしたはずの石を探すことになる。投げた石は結果を発見する手がかりになる。そうなる探す石はいわば自分の分身になる。その効果が意図どおりに働けば石に対する自分の分身、身体の延長という意識が強まるだろう。三木清(1939)が構想力の検討にみた分与の精神が芽生え、もはや石は単なる道具ではおさまらなくなる。

さらに、投げて効果を生む方向はだいたい目標が移動していく方向でもある。だから、身を分けた石は強化子として進むべき方向を指示する志向的な象徴性を放つことになる。目標探知と命中の象徴性が間欠強化的に発揮されれば、その石や投擲行為には大なる者の意志の関わりさえも感得され、呪物的意味が付与されていくだろう。こうして人類が身につけた投擲行為は想像力と構想力のマイクロ/マクロのポリフォニックなゲシュタルトクライスを生みだし、それに応じた神経編成を促していったと考えられる。

遅延と抑制

ところで、標的に当たるかどうかは別として、目標に向けて投げる時に一定の方向を見定めることがこの場合の知覚上のビジョン、観る働きになる。そして石や槍を投げる。それらは身体を離れて空間を飛び、一時の時間を隔てて直接には手の届かないところで何らかの結果をもたらす。この場合の描く働きはこの到達と結果の確認に終わる。このプロセスにおいて観る働きと描く働きのあいだに遅延が生じるが、この点が重要である。遅延期間のあいだ、想像されたことは構想に結びつかず浮遊する。その間は、標的の形象を知覚して心像を構想に統合する処理を抑制的に留保し、投げた石や行為、標的や結果の複合的な心像が、

高ずる期待と共に維持、あるいは増幅していくことになる。しかも現実には想像どおりに命中することは稀だろう。だから、この場合、想像と構想の循環は手仕事加工にみるゲシュタルトクライスのように直動的には回らない。

このように想像と構想が直列的に循環しないとき、そこで膨らんだ期待や希望、あるいは覚悟や心構えといった情意や志向的なパトスの成分が抱かれた心像にリコレクションされ、蓄積されることになる。このときピュイサンスとしての構想力は外に向けた表現化のかわりに、この内向きの総合によるビジョン形成に参加し、予想の産物を予期へと変容させていくかもしれない。予期もまた心像にかわりなく、明確なかたちをもたないが、予想に比べると情況性のビジョンが加味されてより一層、現実にくした具体性と期待が強まっている。

予期の形成には神経系の働きにさらなる抑制力を必要とするはずである。また、抑制によって想像力の働きが萎えることなく内的にはパトス面での備給によりむしろ想像が拡大し強まっていくことに応じうる容量的なゆとりが求められよう。ヒトの脳が他の動物に比して卓越している面をみれば、こうした要請に応じたつくりを認めることができる。ヒトの脳は他の動物に比べて容量的に贅沢な環境になっている。ただしそれは脳全体の大きさや神経細胞の数の多さではなく、むしろ神経細胞1個あたりに占める空間的なゆとりとグリア細胞の相対量の多さによる神経系の生態環境についての贅沢さである(半田,1994)。とりわけ大脳皮質の神経細胞の機能は相対的には抑制性の働きをしているものが多いこと、また意志的な行為の指令や遂行系の反応抑制を含む制御はヒトで発達が顕著な前頭領野の代表的な機能であることは、むかしから現在に至るまで多くの証拠とともにあきらかにされてきている(e.g., Miller & Cummings, 2007; Stuss & Knight, 2007)。

こうしてオーバースローで石を投げるようになった人類の脳は、予想し、さらにそれに期待を込めて構想していくビジョンと、その先は代替的にかたちへと表現化する予定づくりという典型的なロゴスの結構による構想へと向かうこの過程の成立を基礎づけたと想像できる。人間は自己像を未来に投じて経験を想像的に先取り、そのシナリオを構想し、それに従っていこうとする

エピソード的な未来思考 (Atance and O' Neill, 2001) の生成を常としている。ここではさまざまなことを予想し予期して予定を決めることが大好きなわたしたちの心の習性の源流を、およそ100 万年前の人類の投擲行為の発祥にみた。こうした遙かなる過去へと後投げする史的ビジョンもまた、わたしたちが培ってきた想像と構想の力ゆえにもたらされたものにちがいない。

3. 構え (poise)

ところで、先々のことを思い描き、見ることは予想という想像作用のことだから、その見る対象は定かな形象にはならず曖昧な見込みに留まる。だが、この場合の不定性も想像一般の常で、決して否定的な性質のものではなく、むしろ積極的な意味で臨機応変な可塑性をもつととらえることができる。だから、その点でよくできた定かならぬ見通しは実践的にはその自在性と開放性のスコープにおいて意義と価値をもつ。このある程度の作用域を携えたビジョンに対応して体勢がとれる力、これは想像力と相即不離に働くがゆえに、構想力をもつ性質の一面といえ、これを構え=poise として語る事ができる。

英語の poise は姿勢や構えといっても、足下の定まらぬところでバランスをとって姿勢を保つという意味や、どっちつかずに浮かんでいるといったニュアンスをもっている。肯定的にとれば、ある範囲においてとりあえず「よい加減」のところで体勢をとっている状態を指している。これはまさに奔放な想像力とその無常の産物を相手にする構想力の構えの様態を指している。したがって、poise はあとで比較のために取りあげるが、一般に心理学で語られる構え (set) とよく似ていながら、ある重要な点において異なっている。

poise としての構想の構えはプラン (計画) とも本質的に異なっている。プランはまさに予め定め描かれた手順や工程のことである。そこには製図につながるコードがある。プランの仕切りと組立てはもっぱらロゴスの行為になる。前項では予想という心像に期待や希望、あるいはまさにここで語っている poise を統合した予期として構想のビジョンを捉えた。その立ち位置はかたち定かに線引きされたプランへと向かう流れにあって予想と予定の中庸にある。このありようは構想が外部

への表現化でありながら想像とつながっているがゆえのことでもある。

プランと構想の異なり方は「漠然とした計画」とか「不明瞭なプラン」ということが当然、よい意味をあらわしていないことからしてあきらかである。これに対して予想や予期の見通しや見込みのもとにある構え (poise) の場合は基本的にとりとめなく不確定であることを本領とする。見通しが甘く、見込みが漠としていることが逆に構想力の構えとしては力の源泉になっている。だが、こういういい方は精神のある側面をいらだたせるにちがいない。前世紀半ばに、

「以下の頁のどの箇所においても「プラン」を「プログラム」と置き換えることができる」

と述べて、わたしたちの行動を制御するプランの構造について論じた Miller et al. (1960) のこの立脚点がまさに象徴しているように、予想を予定におきかえて、先々に為すことを可能なかぎりアルゴリズムにあらわそうとする傾性は、分類と命名によって世界を知ろうとするロゴスの知性の典型的なふるまいである。その知性からすれば甘い見込みやアバウトな見通しといった類いものはまだ手を付けていなかったおのれの仕事として映る。だから、とても落ち着いてはられないだろう。

ところが、構想力の本懐はそのいきり立つ知性のことをも予想し、その気持ちを受容したうえで、見通しの甘さを前向きに甘受し、予想という想像の曖昧な見立てを受容しながらそれらを総合することで遂げられる。この点でここで奮われるのはピュイサンスとしての構想力だが、この基本的にはロゴスの性質をもった悟性的な力にとっては、みずからの性質を脱構築し超克することが課題になる。加えて構想力は理想という豊かな想像作用のうちで働く理性の言い分も受け入れつつ、それでもきわめて実践的な行動の先導を担う役割を果たすために、耐えて見通しに遊びをもたせる構え=poise にその力量が問われることになる。それはおそらく放縦な想像力との相克があってこそ捻出されているといってよいだろう。

構え: set と poise

心理学の領域でも早い頃から構えが語られ検討

されてきた。ただし、この場合の構えは set であった。Set は個人がある特定の状況を予期し、行動の準備態勢をとること、あるいは認知や反応の仕方についてあらかじめ「一定の」方向性をもつことを指している。だから広い意味では思考パターンや性癖なども構えのひとつになる。性癖は個人的な精神傾性の偏りであるが、その偏りに沿って心身が準備されているという構図は心理学的な構えの意をよくあらわしている。さらに二様の代表的な構え (set) の例を確認しておこう。

20 世紀初頭のドイツ、N.K.Ach に代表された Würzburg 学派の心理学者たちは、思考の方向を統べる決定傾向 (determining tendency) について考察したが、これも構えの一種であった。たとえば、連想実験では過去の経験が連想のされやすさを左右するようにみえる。だが、彼らの研究は未経験の連想関係であっても、あらかじめ与える情報なり示唆が連想の方向を導くことを示した。これにより、彼らは顕在的な刺激—反応関係であらわされるような経験主義的な拘束性を、潜在的に構成される可塑的な傾性に緩める視座を提供し、行動や思考の方向性を決める構えの存在を示した。その方向性は幅をもった一応のものとして見いだされたから、決定傾向は *poise* に近い set であった。

もうひとつ、構え (set) に焦点をおいて心理学史にひとつの里程碑を残したのは 20 世紀半ばに Wisconsin 大学でアカゲザルを相手に研究を進めた H.F.Harlow (1949) であった。当時、学習理論は顕在的な刺激—反応連合にもとづく行動主義の学習観が台頭していた。だが、その背後では洞察のように、顕在的な行動を介することなく潜在的に進行する認知構造の変化を認めようとする認知論的な学習理論の観点も E.C.Tolman などを筆頭に提起されていた。Harlow はそのふたつの学習観を橋渡しすることで理解できるような学習事態の成立を示した。その実験はアカゲザルを被験体にしたもので、一定の課題法則をもった刺激対を少数試行ごとに新奇な対に変化させていく弁別課題の学習であった。

その結果、長い試行錯誤の訓練を要したものの最終的には理想的に遂行できる水準に学習できることが確認された。これは個々の物理的な刺激特性に結びついた反応の連合関係だけでは説明できない学習で、課題全体に通底する法則性 (たとえ

ば、新奇の刺激対で、一方を選択して報酬がなかったら、次試行では他方の刺激を選択する。報酬があったら以降その刺激を選択する) を学ぶこと、すなわちいかに学習するかを学習すること (learning to learn) を要求したメタ学習の課題であった。Harlow はこれを学習の構え (learning set) の獲得と称した。

この種の構えの獲得はとくに見通しをとまなう複雑な学習には不可欠の過程である。人間の言語の発達過程においても、たとえば生後 1 歳半から 3 歳ころにかけて語彙量や統語の仕方、文生成などに飛躍的な発達をみる時期がある。これは語彙爆発とかダムの決壊期 (Pinker, 1994) などと呼ばれ、ヒトの発達過程のなかでもとりわけ顕著な変化のひとつとして知られている。この背後には対象とことばのあいだにある諸関係に潜む法則性を暗黙的に修得する学習の構えの成立が大きく関与していると考えられている。

しかし、学習の構えにしても決定傾向にしても構えは一般に両刃の剣である。思考や行為を習慣化、固定化することで、問題解決にあたり機能固着を招き、解決を遅らせることにもなりがちだからである。メタ学習の成立はいわばひとつの世界観の形成である。人類が自然界に働いている法則を見いだそうとして科学に邁進してきたそもその動機も同根であり、それが科学における定説やパラダイムの強靱さの問題にもつながっている。長い試行錯誤を経て確立に至った学習の構えもそれゆえに本有的な固執性を孕んでいる。F.Bacon 流に言えば、構え (set) は偶像化されやすく、容易には手放しがたい迷信的な行動原理、思考規範になりやすい。

そのため心理学における構えへの関心は、一方ではこの負の側面に着目して、思考の隘路がいかにつくられやすいか、また人がどれほどそこに執着するかを示し、その行き詰まりを打開するための観点の再構造化や視点の中心転換 (recentering) といった問題解決のありようを見いだすことにも向けられた。つまり、構えそのものと並んでその解体や再構 (reset) のほうも十分魅力ある主題となった。

だが、この点を前項までに述べたことからみれば、機能固着に陥るのは *poise* をもった構想力が後退し、set がいわば暗黙のプランとなつてこの過程をプログラム化するためということが

できる。もともと set としての構えはアルゴリズム化できる点でプランと相同とってよい。とくに Miller et al. (1960) が扱った TOTE (Test-Operate-Test-Exit) のようなプランはセットの可視化ともいえ、その組み合わせによって一定程度に複雑な行為の連鎖を予定的に組む（セッティングする）ことができる。だから、機能固着はプランが定まることで見通しに甘さがなくなり、それによって計画どおりに実行すればできるはずだと思込むことで不確実に生じる現実的な問題に対処しがたくなることだといえることができる。これに対して構想力がもつ構え (poise) はこうした行為や展望の固着から逃れるための「あそび」として発揮される。

状況的構え (situated poise)

振り返ってみてみると 20 世紀前半、日本の心理学でもたとえば、大脇 (1937) がその多くを Würzburg 学派の知見に依拠しつつ表象研究をつうじて、表象の心構え (Einstellung) の側面に着目し考察していた。それまで表象に対する一般的な見方は知覚像の模写であった。だが、大脇は表象が知覚されたことがらを創造的に変化させていく点に着目し、それを心構えとの関連で再検討した。「心構へとは心の向きであり動かうとする構へである」というのが彼のシンプルな心構えの定義であった。

大脇はその説明の例示として、同じ五百グラムの箱でも小さい箱は大きい箱より重く感じるというシャルパンティエ (Charpentier) の錯覚をとりあげ、これは表象がもつばら知覚の産物なのではなく、逆に知覚に影響を及ぼし、実際に見聞き感じる体験をつくっている例であるとした。このあらかじめ準備され知覚に能動的にかかわる表象が心構えである。この錯覚で小箱のほうが重くなってしまうのは道理で、持つという行為をするにあたっては心構えをもって身構えをする。実際、経験にそくした予想に沿って持ち上げるべき動作とその動作にそくした筋運動の体勢をとるから、大箱より小箱への対処は動員される心身の資源が小ぶりになる。結果、渡されたマッチ箱が 1 キロもあれば、片手にあまる代物として受けとめられる。

このように予想にしたがって心構えや身構えにつなげていく日常行為の構えは不確定な現実の出

来事のなかで臨機応変に働くものだから、一定のプランで対処できるような心理学的構え (set) ではなく、種々の情報を総合し幅をもって応じうる構想力の構え (poise) の例に近くなる。知覚した対象から想像される重さのイメージ (心像) ができ、それに応じた身体の体勢をとる過程、この感性由来のビジョンと具体的行為の橋渡しにピュイサンスとしての構想力が働く。

構想力の構えが不定形のビジョンに対応しているということはその特性が基本的に状況的 (situated) だということである。心理学的な構え (set) は、頭のなかに行える心的モデルとして了解されてきた。だから、それはまさにそのプラン設定をもってトップダウン処理の典型として次の事態にもあてがわれていく。これに対して構想力の構え (poise) の場合、たとえ心理学的な構え (set) が描かれていたとしても、それは前段階の心像のひとつとしてあり、総合の一要素に留まる。それを行為に表現化する構想の段階では環境や文脈の状況に依拠した調整がなされる。その変化は制約というよりも可変としてある。この状況的 (situated) という意味は決して状況のなすがまま待ち受けるという意味あいではない。それとは反対に poise としての構えはもとより漠とした心構えを具体的行為に、思考に、と表現していくときに状況をいかに利用するかという能動的な探索の体勢のことを指している。その点で poise という方向づけにみる構想のピュイサンスは広く環境情况的なファカルティとしての構想力と併せ発揮される力であることもわかる。

心理学的な構え (set) が研究されてきた状況は被験体が動物であれ人間であれ、自然事態とは異なる実験的に統制された特殊環境であった。たとえば、数百種類の刺激が用意された複雑な学習課題が設定されたとしても、その場は日常世界の生態からは大きくずれていた。だから、心理学的な構えは日常的に自然なファカルティとしての構想力を適切に働かせる余地なく、実験者があらかじめ思い描いていたセッティングに多数の試行錯誤を伴う訓練をとおして成型させていく特殊な事態であった。それはまさに set のための setting であったといえよう。それゆえに set はおのずと機能固着を招来しやすい状況にあったともいえる。

一方、現実の生活世界における営みはどうかといえ、心理学的な構えは予想や意欲の想像作用

の一種としてあり、そのもとになんらかの行為が表出するときのビジョンは構想力の構え (poise) として能動的に環境の状況を探求しつつ統合を図るものに変容しうる。

ここで poise をビジョンとしての構想力の性質のひとつとして語っていることに鑑みれば、Noë (2001) が知覚経験を環境に対する能動的な実践参加 (a form of active engagement with the environment) ³⁾ と語り、「知覚はたまたまわたしたちの身に起きていっている何ごとかではなく、わたしたちが為していることなのだ (Noë,2004)」だから「どのように見えるかは何を為すかによって決まる」と強調していることと結びつく。同様に O'Regan (1992) の場合は「知覚していることは探索的な行為 (exploratory activity) そのものから感じ取られる」と表現する。同じ見地に立つ Thomas (1999) の表現では「知覚は環境に対する能動的な問いかけ (active interrogation) の継起」ということになる。これら視覚や触覚を例に展開されている昨今の代表的な知覚観のひとつはビジョンとしての構想力にあらわれる構え (poise) の状況的特性とよく符合する。

以上をまとめる意味で心理学におけるイメージ論争を例にとり表現し直そう。心理学的な構え (set) が学習の構えとして獲得されたとすれば、それは頭のなかに心像として形成されるのだから、そのセットはたとえば Pylyshyn 流 (e.g.,Pylyshyn,1973) にいえば、命題的な知識になるのだろうし、Kosslyn 流 (e.g.,Kosslyn,1975) にいえば擬画像的なフローチャートや反応場面の描画になるのかもしれない。そのどちらであるかをめぐり長年にわたり戦わされてきたイメージ論争のその戦場こそ構想力の構え (poise) の例示である。そこで論じられてきたイメージは心像というよりも心像に関する構想であった。次第にそれぞれの構想はほとんどセット化した形象となり、それゆえに双方譲らぬライフワークとしての論争に展開した。だが、その背後で問われていた当の心像 (イメージ) は実際のところ命題でもあり、擬画像でもありうるもの、だからそのどちらでもないものとしてありつづけてきたのかもしれない。またそれゆえ、そこから発した構想力のビジョンの視角は二様のモデルの構え (poise) として広がりえたともいえそうである。

ここでは構想力をもつビジョンの特性を、第一

に観ること、第二に予期と予想のゲシュタルトクライス、第三に poise としての構えという3つの観点から考察した。構想のビジョンが単に見通しや見込みの換言ではなく、想像との連関でなされる外部表象化への眼差しとしてあることと、そのうえでなおそれが想像からの飽くなき形象摂取の探索的観察でもあることに焦点をあわせた。今後はさらに観点を広げ深めると共に、構想力をもつデザインやコンセプトとしての特性についても検討を加えていくつもりである。

註

- 1) Harlow がその一連の実験で用いた装置は、WGTA(Wisconsin General Test Apparatus)と名づけられた。この装置はその後現在に至るまで、主としてサルや幼児を被験体にした広汎な学習実験で改良されつつ使われ続けている
- 2) 通常の弁別課題では「赤」と「緑」が刺激で「赤」が正刺激であれば「赤」への反応が十分確立したことをもって学習の獲得が判断される。一方、Harlow の学習セットの訓練ではたとえば、正反応が続いたら、別の新奇な刺激対、たとえば「四角」と「三角」に変える。第一試行はでたために反応せざるをえない。しかし、それが正答すればその刺激に反応しつづけ、誤答した場合は他方の刺激に反応していくことで適切に遂行していくことができる。こうして刺激対が変化した際に同様の反応の仕方をしていけば、最適に反応していけることになる。このように書けば簡単なことだが、この反応の仕方を事前に知らない被験体にとってはなかなか困難な課題になる。人間がおこなっても迷信的な反応、不適切な学習セットを形成しがちになり容易には獲得できない。
- 3) この engagement は文脈的にフランス語の engagement、しかも J.P. Sartre の用語アンガージュマンの意味あいを含めてみると一層適するように思われる。

参考文献

- Atance,C.M. and O' Neill,D.K. 2001 Episodic future thinking. Trends in Cognitive Sciences,5,533-539.
- 半田智久 2004 「構想を語る著者たちは「構想」の意味をどのようにとらえているか」構想 3,87-106.
- Harlow, H.F. 1949 The Formation of Learning Sets. Psychological Review, 56, 51-65.
- 金原省吾 1933 『構想の研究』古今書院。
- Kosslyn, S.M. 1975 Information representation in visual images. Cognitive Psychology, 7, 341-370.
- 三木清 1939 『構想力の論理 第一』岩波書店。
- Miller, B.L. and Cummings,J.L. (Eds) 2007 "The

- Human Frontal Lobes: Functions and Disorders, 2nd Edition". Guilford.
- Miller, G. A., Galanter, E. & Pribram, K. H. 1960 "Plans and the Structure of Behavior" Rinehart and Winston. 十島雍蔵・佐久間章・黒田輝彦・江頭幸晴訳 1980 『プランと行動の構造—心理サイバネティクス序説』誠信書房.
- Neisser, U. 1976 "Cognition and Reality" 古崎敬・村瀬旻訳 1978 『認知の構図』サイエンス社.
- Noë, A. 2001 Experience and The Active Mind. Synthese 129, 41-60.
- Noë, A. 2004 "Action in Perception (Representation and Mind)" MIT Press.
- 大脇義一 1937 『表象の心理學』東宛書房.
- O'Regan, J.K. 1992 Solving the "Real" Mysteries of Visual Perception: The World as an Outside Memory. Canadian Journal of Psychology, 46, 461-488.
- Pinker, S. 1994 "The Language Instinct: How the mind creates language" William Morrow and Company. 椋田直子訳 1995 『言語を生みだす本能上・下』日本放送出版協会.
- Pylyshyn, Z.W. 1973 What the Mind's Eye Tells the Mind's Brain: A Critique of Mental Imagery. Psychological Bulletin, 80, 1-25.
- Stuss, D.T. and Knight, R.T. (Eds.) 2007 "Principles of Frontal Lobe Function" Oxford University Press.
- 谷川浩司 2007 『構想力』角川書店.
- Thomas, N.J.T. 1999 Are theories of imagery theories of imagination? an active perception approach to conscious mental content. Cognitive Science, 23, 207-245.
- Weizsäcker, V. 1940 Der Gestaltkreis : Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen. Georg Thieme. 木村敏・浜中淑彦訳 1975 『ゲシュタルトクライス：知覚と運動の人間学』みすず書房.

2007年12月8日 受稿

2007年12月28日 再受稿